滿仲

昭和改訂版

外十四

特257
719

始

特·257
719

満仲

〔梗概〕多田の満仲が子義女丸、學問の爲め程近き中山寺に登ぼされしが、明け暮れ武勇をのみ嗜み學問に心をよせざりしより、父満仲不孝の子として許さず、仲光をして美女丸を連れ歸らしめ、一刀の下に斬つて捨てんとせしを、仲光押しとどめしも満仲の憤り解けず、早く美女の首を討て然らざれば汝諸共其儘には置かじと嚴命す、仲光如何はせんと思ひ惑ふ所に、其の子幸壽主君に代り申すべし、我が首取りて給はれといふ、恩愛の情忍び難きを忍び仲光は涙ながら、我子を主君の身代りとして満仲を欺き、美女丸を叡山ふ落し參らせぬ。爰に比叡山より惠心の僧都、美女丸を伴ひ來り、満仲に面接して事の始終を物語れば、やうゝ満仲の心も解け、めでたき折なれば迚、仲光は亡き我子の事を想ひ浮べ、盡きぬ悲しみを袖に包みつゝ喜びの舞をまふといふ武家主從の哀話を脚色したる曲なり。

シテ　藤原仲光
ツレ　多田満仲
子方　美女丸
同　幸壽
ワキ　惠心僧都
所　攝津多田の庄
季　不定

滿仲

詞て　昔も源の滿仲まつ仕へ申す義東北仲
光と申者まてひ相も滿仲の御子の美
女御前まつ学問の為都上り迄き中山寺
まつ光せ来せ給ひて山越まつ給ぎ五位
中てゝ来れとの清綱にそ山籠まつ美女

清涼寺の五位中に今涵仲の五位へ
と云いに中上に女清涼の五
下向まてに（涵仲）はしめへ呼出しへしてに
ろに此方へ清入少へ（涵仲）いろは女丸
芝弥ろしや久敷書より呼下さぬ
も学文よくせよとより上出ん五種破

罰せんと紫檀机を破泥の五種
夫こ讀誦し路へと女女が前よそさ
し墨する（英女上禾）女ハ父清の仰を付
て色位ひも書き洗番山手習ふる
色書の墨しりば減してや五種九字
をぞ不讀ざり見れば今更よ減よむせ

……
奴平なり　海仲　夢こそ海仲がゆめなれ
ゆ一寺の書数清を切ぶそして法経
清奴ハ理なり　海仲の　奴ハ　美女の　よこ清ぶそ
宮絃ハと　上　小人世いをぬ口おしれ
日上　おいを雑為おまバ父ゆ出しもりいひし
事よ何とを付奴海道の雪　人ハ　弓八　見せん

……
を伝系ゆ子といふひもなかるべし
……
とて海仲刀を取張へバ老里出家や
……
仲光ゆ云付まゆ里申つあ尼うれ
……
美女ゆ涙の伝ゆ狂ぞいこましき
海仲の
いりに仲光ゆ伐結めてやへ美女を
寺より峰下さぬハ学文の為まて丁寺を

少へ的箭武勇を嗜まんよハ寺に
居て此甲斐ハ何の事ぞ　沖（して下）淀殿よ
り此去方々折（上）の所せつらんまてこそ
少べられ先清綱刀を（カセ）張り少へ　（清仲ノ）いり
に仲光不詮女戒討（ッ）て取り少へ沖
なれ拍方ゝバ（上）仲光せよ人ぞよハ（ケ）

海（ひ）ひ（て）ゝ（て）ぞ　居（て）ハ（ノ）所を詮を敵（ロ）
以の外此清綱婦まてハ去り量ゝ
きことハ存少せ（ロ）ゝ程とハ存せぎを作（ロ）
いやゝ何と所淀少せ一（ト）先落し申さ
ぞやと存ハ（ロ）いろ小中上ハ（ロ）只今も以
此外の所様婦まて（ロト）遂成仕りそハ

美女
いかに仲光唯今こゝづのゝを迦しつ
是は仲光が申するによつてなり
所詮美女を討て首参らせよさな
きものならば仲光共に人手にかけは難
まじきといひ置き給ふをば我抑ふべしに
申し之真是非事ハ力なし御是非生
一一一一一一一一、一一一一一一一一、一一
申いらふしきには思ひ定て来りたり
詞
其こそ美女が首を立父御の御目に
無也　して実にあへなげなる御諚に
てもいかに哉何と御諚なりとも是非なかり
ひとして一先落し申さでかなふずるにて
や何とかぞ又御使の立つるとかや

あゝ笑止や掬仏と仕るべき　上　まゐらや
何事を掬ひみるける浮世哉　美女　思ひ
出せる事みな阿耨多羅三藐三菩提
波羅をば言せもてやして　上　是又宿因
過去の理り　美女　過去まてなもて
現世より受けて　日上　報ひ人の科あら

ぬ所なるまゝ拾ひ
ゝ浮世北斗と思ふなよ　たゞひ
よ夏の事を語り語らば時鳥なるまゝや
首とれや仲光と是の塚をなこゞも
まゝ毛丁我出しかりなれ　して　元やあ
乗法年の程よりぶ浄瑠璃代りひ

八ん物我慢ならぬ家を色事によりて
こゝにこゝにこゝにこゝにこゝにこゝ
ん〻ほせぬ口惜さハバ　幸壽　いりこの父
清ゆ申ハ只今此頃てそ幸壽が身
ゆ留りて此へ寄こそ父清ハ浦仲乃清
乳人幸壽ハ美女此乳人今此際
丁我こ此大事なれ順当と申年乃

程たゝやく幸壽が首を取美女と
号して浦仲の清国ゆ留られ此へ
何と申そ美女此の命ゆ代らん
と申り清石仲光が子にこゝ此へ寄こ
汝が首を取落ゞ衣ゆ包こ美紗れ小
遠ゞと此国ゆこの清物あゝバさこが

親子の仕事なれば、よもさぐらるまじ。
皆んじゆまじ。夫婦は命より代里少へ
時刻うつして叶ふまじと、太刀追取
て仲光を幸壽が後より立よれば
英女上　英女は驚き北少しさよ。仲光が袖ふ
元付て脇ひ寄壽を失ふせ。後より自害

よ及ぶべしと、泣少しみて制まきば
幸壽　ふおうのとおり習る事弓矢元
身の習ひぞらし　英女　少しやすこまふ
幸壽　幸壽　命の際　幸壽もまきこみ
英女　英女も立てよる　彼方は君　英女　武方
君思ひ子　して　中まて中こ仲光が

同上

身は見苦しう情なくじ何のとうせまし
とやあらんと思ひ給ふ心も弱り果て
る斗なり　美女上　歎て　ものだに情まれぬ
方を何とぞ只かくふんん中に情の
法さいうあらん　侍人此為なる
ぞ今世間の此命なる習ひ中さだも

同上

弓矢此家の名をしき　かなこ式
なるもいとけなき此身なれば理り
の成ぬ事ぞ子ハをしく思ひ
手をかけんと　ぬ弱しや白木の弓
多ふ所の事ぞ子ぞと　切つて親ん
乃書　対にうつくしき孫子を夢と

なしはなり〳〵（シカく）して いうふ申上ぶる
這よ仕せ女清子を討事りてゝ
浦仲 いしく色仕こる物ゝさこそこの新出
来強よ有つゝむ形 してゝ いやさハぶる産
ゝいで いうよ仲光ハ れく事さるうと
見を家新北浦を葉まてゝひし

浦仲 いうよ仲光 おとと新知のとく恵じて
美女あぐで子とこもの有し 事ふより
してハ 仲光ゝ子乃事事を我子と
定ゝべし急ぎこ呼出し ゝて さんぶ生
四事ゝ有ゝ女清子北四剛をう者
しみ生涯より こ結切 事よ失て

同くハ仲光ゐを古曙殺り少へ 相撲
だやと云ひひ 満仲 何故くハいひつ事
さぞ思ふん女丸を家子乃
如くそこそしふ二人の者よ物を
をひ 同 寄やまを仕習ひ賞し
も殺ものゞれぬぞと仲光を見よ角

ふ走らし殺ふぞよし者き 上 さ仕ゞ親
子此中なれバ〳〵哀とや又思ひ子此
法とふ法の子日ぎを学こ殺ふ去ら家
さよ〳〵 あき 思ハ此数山東化の僧都
まてひ掏を去子面有て只今満仲
乃法師へと云ひ出んらう〳〵出屋少へ

いくよ武田へ案内申し誰まて渡り
ゐぞや恵心比僧都の坊下向まく
ゐ いくよ仲光 わき 面白まま多ゞ事ハゞ
先ん案ゞ案りたる由申へ 畏て
いくよ申上ゐ 恵心乃僧都の坊下向ま
てゐ 浦仲 畏ひまゝぞや 上 先ん武方へと

申ゐへ 畏て 武方へ坊入へ 心 わき 得
申ゐ 浦仲 面白今ハ何乃為比坊下向ま
ゝゐぞ わき 法ん比今案るゝ 篠の
義ま能ぞ 夢面白事申さん為
ゐ案りてゐ 浦仲 篠りまゝ不思儀の者ま
ゝゐ 祖ま 上 仲光に申付失ひゝゐ

わき
雲ゐ事まてゐ出んゐを静めて吟
しられ少へ美女ゐを失ひ中せとの
ゐ使頻繁しに伸出んゐよ〻ふ招い
うで三世の主君を手にかけ中べきと
思ひ吾子此事を嘆き首を切り美女と
申てゐ目ゐ無くひされば吾子にのへ

て思ふ程の美女ゐの不審なるし
おハしませと美女を引きし滝伸乃
ゐ為まて我こ事りられ　滝伸　されバこそ殺
来孫なる美女ゐ九郎孝嘉を殺さば法
せゐ者ど自害ゐハ及ばぬぞ　わき　殺こ
諸事を義置て吉嘉ゐ佛事と

さしも又美女御前は御ふちん有るし
我はしまはせと 涙を流し申されば
猶きこんもを弱ことを了額ずり及び
余りの仲光餘りの嬉しさに法雪や
菊の酒仙家に入し身の七世の孫に
逢ふ事もかくとへあらずや親と子

乃一世の契は二度逢ぞうれしき
引て親子あふむの盃は 幾久しさも
限られぞ いかに仲光目出度折
なれば一指お舞候へ 幾久しさを
限られず 舞鶯の友なきこれに
浮沈に 下安からぬ思ひこそ河まで

思ひて我とあきらんひて我とあれ　利て哀や
おもふ子は幸まあがあるバ英女沸ま
とおく舞せきを仲光ハ手指ゐたや
しかるべき　ぶひハ涙　同上　飯沼貝ハ蓮
の袖　まじ界ハ波の上露も下露

も　同上　れくれ先ぐつ浮世の習ひ眠ね
ゐ鏡き者ふハ姫び乃影下帰る是
と上なりとて恵心の僧都ハ英女を伴
ひ踊り踊へバ仲光を遣はせ速
よ系里は度のぼふん人ゐよ解ば
かまへて習学文熟よおハしませと

377
394

昭和十二年十月廿五日印刷
昭和十二年十月三十日發行

定價金五拾錢

著作權所有

著作者　東京市下谷區上野櫻木町四十八番地　寶生新

發行兼印刷者　東京市京橋區銀座西六丁目三番地　江島伊兵衛

發行所　下掛寶生流謠本刊行會

終